

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2021年 3月 12日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年二月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』(1989、刈谷市教育委員会 所収)の「狐の提燈」「猿」を読みました。

「狐の提燈」は一九三六(昭和十一)年八月号の『赤い鳥』に発表された、昔話風の作品です。太郎兵衛という紺屋が女の子に化ける狐の様子を見てしまい、だまされる前に「こつちから裏をかいて、あべこべにだましてやれ」と思います。ところが二度までも狐に化かされ、結局預けた染粉は裏の田んぼにぶちまけられていたという話です。三郎作品には、同じような趣向で、「狸なんかに化かされるものか」と大見得を切ったために、いたずら狸にだまされるという話がありました。いずれも初期の作品「ちぢの小さな法師」(1932、)「馬方八五郎」(1933、)です。

今回の作品「狐の提燈」は茅原順三の名前で発表されています。「茅原順三」と言えば、『赤い鳥』初掲載の「赤穴宗右衛門兄弟」はじめ「人形芝居」「おばあさんと鬼」「あぐひ太郎」「夢買ひ」の作者名です。いずれも『赤い鳥』掲載一年目の一九三二(昭和六)年に発表された、小泉八雲の話や古典を題材にした作品でした。それから五年後に久しぶりで昔話の趣の幼年向き童話を、しかも茅原順三の名で著したことには特別な意味を感じます。「狐の提燈」掲載の一九三六(昭和十一)年八月号は、鈴木三重吉が六月二十七日に亡くなり、『赤い鳥』休刊および『鈴木三重吉追悼号』予告の記事のある雑誌だからです。三郎はこの年の一月号以来作品発表を休んでいました。八月号には、『赤い鳥』の作家・編集記者として育ててくれた恩師への感謝と哀悼の気持ちを込めて、記念すべき茅原順三の名で、初期作品の傾向の「狐の提燈」を載せたのではないかという気がします。十月に出された『追悼号』にも茅原順三の名前で「胡桃」という短編を出しています。

「猿」は一九三三(昭和八)年三月号の『赤い鳥』に森三郎の名前で発表された童話です。平安時代を舞台に、お百姓の息子の鮪(しび)という少年の日常を描いた作品です。鮪の家の近くにお公家さまのお屋敷があります。ある時、木に登っている鮪の姿を、お屋敷に仕える小舎人(ことねり)たちが「猿そっくりだ」とからかいます。鮪はお屋敷のお嬢さまと遊びたいと思っていました。が、「猿」とからかわれる自分には不釣り合いなことだと恥ずかしく思います。情けなさや悔しさを埋めるように母に甘えかかりますが、疲れて帰って来た母は我が子に優しい言葉一つ掛けてやる事ができず、朝は子供が寝ているうちに両親とも畑に出かけてしまいます。鮪は「どうして自分は、お公家様の家に生まれなかつたんだろう。なぜお母の子になんぞ生まれて来たんだろう」と思います。鮪が社会の矛盾を感じた最初の出来事だったかもしれませぬ。その後、鮪は川で捕った魚をお嬢さまにあげる機会に巡り合います。大喜びするお嬢さまの姿を目にしただけで、鮪はうれしくなり、「猿」と言われたことなど気にならなくなります。幼い鮪が、母に相手になつてもらえない寂しさを抱きつつ、何でも一人でして、友達を求め成長していく姿が感じられます。しかし鮪は、畑に行く前に子どものために「たつぷり」ご飯の用意をしてくれている母の愛情にはまだ気づきません。

三郎は「猿」を発表した翌月、四月号の「雪」で、尋常小学校六年生の少年の話を書いています。ここでは、少年は母に対して甘えと反抗の態度をとった後、母の自分に対する気遣いを知り後悔します。「猿」の主人公・幼い鮪よりも成長した少年の心理を描いています。

四月号からは現代の日常を舞台に、自我が芽生え、揺れ動く少年の心理を描いた作品が多くなります。二月号の「笛」も、三月号の「猿」と同様、古典や昔話をヒントにした舞台を使いながら、少年の心の葛藤と成長を描く作品でした。二月号・三月号の作品は、それ以後の「現実的な・真実味のある」(三重吉の評価)作品への橋渡しの作品だという感想を持ちました。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品(二〇二一年四月九日実施予定)
「山のあなた」(『森三郎童話選集夜長物語』所収)